

生徒の疑問から始まる歴博見学会

千葉県立千葉女子高等学校 榎澤 和夫

1. 実施学年及び教科・領域

高等学校第3学年（大学で歴史系の学部に進学したいと考えている生徒を対象）
特設授業（希望者のみの参加）、進路・歴史学習

2. 学習のねらいと博物館の活用との関連について

(1) 主題名 歴史認識を深める歴博見学会

(2) ねらい

ここ数年、博学連携の取り組みとして、生徒が博物館の展示解説を一方的に受けるのではなく、まず生徒が「問い」を持って展示を見ることを進めてきた。展示されている「モノ」には展示する側の意図が示されており、博物館「見学」とは、解説を見学者が読んでその意図を読み解くか、または研究者の解説を聞いてその意図を理解するというのが一般的である。博物館見学を授業に置き換えた場合、語りたいことを語る、教えたいことを教えるという授業方法では、生徒が主体的に歴史認識を形成していくということは難しい。

博物館の展示は「教材」の宝庫である。そこで、教材である展示物を「問い」を探しながら見ることで、疑問に思ったこと、考えてみたいこと、知りたいことを生徒自身に発見させること、これを第1のねらいとする。次にその疑問に対する自分なりの解答（仮説）を作らせることを第2のねらいとする。最初は思いつきでも良いが、できるだけ多くの事実に基づき、論理的に自説が展開できるように指導する。可能ならば、調査する時間も設けたい。そして最後に、研究者ないしは教員と生徒が、展示室でその仮説をめぐって対話をおこなうことで、生徒の歴史認識を深めさせること、これが第3のねらいである。

(3) 博物館との関連

生徒が出した疑問をふまえて、研究者や教員が歴博展示の解説をおこなった。

①2011年度－生徒が第1展示室の中から疑問点を探し出し、その疑問について研究者が解説をおこなった。

②2012年度－生徒が第3展示室の中から疑問点を探し出し、その疑問について教員が解説をおこなった。

3. 指導計画（その1：2010年度）（5時間扱い）

過程	時間	○学習活動 ●学習内容	指導上の留意点
①	10分	●ガイダンス ・歴博の概要について解説を受ける。	

②	40分	●第3展示室解説 ・「江戸図屏風」に登場する人物に注目させ、展示の見方を解説する。	・展示を解説するだけでなく、「問い」を重視し、「なぜ…」 「どうして…」と生徒に投げかける。
③	50分	○第1展示室自由見学 ・展示されているものから、「変だなあ探し」をおこない、ワークシートに記入させる。 ・疑問に対する、自分の考え(仮説)を書く。	・展示を漠然と見るのではなく、目的意識を持って見ることを強調する。
④	30分	●バックヤード見学 ・研究室、調査室見学をおこなう。	
⑤	50分	○「中世の鏡」調査体験 ・鏡の特徴を確認し、時期ごとにまとめていく作業をおこなう(村木二郎准教授の解説)。	
⑥	50分	●第1展示室解説 ・③の「変だなあ探し」で探し出した疑問を、村木准教授に答えてもらうと同時に、展示室の解説を聞く。	・解説を聞いて、疑問に思ったことなど積極的に質問するように指示する。
⑦	45分	○自由見学 15:30～	

(その2:2011年度)(4時間扱い)

過程	時間	○学 習 活 動 ●学 習 内 容	指 導 上 の 留 意 点
①	40分	●くらしの植物苑見学 ・岩淵令治准教授の解説を聞く。	
②	40分	●バックヤード見学 ・図書室、研究室等見学	
③	50分	○第3展示室自由見学 ・展示されているものから、「変だなあ探し」をおこない、ワークシートに記入させる。 ・疑問に対する、自分の考え(仮説)を書く。	・展示を漠然と見るのではなく、目的意識を持って見ることを強調する。
④	40分	●第3展示室解説 ・③の「変だなあ探し」で探し出した疑問に、榎澤が答える形式で展示室の解説をおこなう。	・展示を解説するだけでなく、「問い」を重視し、「なぜ…」 「どうして…」と生徒に投げかける。
⑤	30分	●企画展示「紅板締め」見学 ・澤田和人准教授の解説を聞く。	
⑥	45分	○自由見学	

4. 実践の概要

(1) 2010年度実践

①第3展示室見学解説（過程②）

第1展示室でワークシートを使った「変だなあ探し」をする前に、「江戸凶屏風」を題材にして「変だなあ探し」の方法について、具体例を挙げながら説明した。例えば人物に注目するように指摘し、「日本橋のたもとにいるお坊さんは、なぜ仏像の絵を持って座っているのか」「赤い傘に隠れている人物がたくさんいるのはなぜか」「江戸城に向かって行進している白い着物の集団は何者か」「火事でないのにまといをもっているのはなぜか」といった疑問を探し出しワークシートに書くこと、さらに自分はどうか考えるのか、自分なりの考え（予想・仮説）を書くように指示した。

その後、「国際社会のなかの近世日本」を中心に解説した。ここの展示は、中央に東アジアの地図を置き、左右に4つの「口」が効果的に配置されている。江戸時代の日本が「外」に向かってどのように開かれていたのかが視覚的に理解できる工夫がみられる。長崎口では、生糸を輸入し銀を輸出するという形から、葉や砂糖を輸入し俵物・銅を輸出するという形に貿易構造が変化したことを指摘した。そして、対馬口では通信使行列を民衆に見せる意味を、薩摩口では那覇港に停泊する島津の船に着目させ、琉球と薩摩藩との関係をそれぞれ考えさせた。さらに松前口では、アイヌ絵から日本人のアイヌに対する差別的な視線の問題を考えさせた。

江戸時代の外交については、「意外と開かれていた」「鎖国とはいっても外国との交流があった」「ロシアが関わっていたことは意外だった」等の感想を持ったことからわかるように、生徒が近世日本の外交関係を、完全に国を閉ざした鎖国イメージではなく、東アジアの国際社会の中で位置づけて理解しようとしているのがわかる。

②第1展示室自由見学（過程③）

第3展示室でおこなった「変だなあ探し」と展示解説を踏まえ、第1展示室を自由に見学させ、ワークシートに1人2つ以上の「変だなあ」を書くように指示をした。また、仮説を立てる上での注意点として、なるべく多くの事実に基づいて自分の考えを展開するように指示をした。

見学終了後、ワークシートを回収して村木准教授に渡し、回答のための準備をお願いした。

(ワークシート)

「たのしい!? 歴博見学会」ワークシート

Q1. 第3展示室（近世）で「変だなあ探し」をして下さい。「気になったもの」「何だコレ」と思ったもの、「なぜ〇〇〇になっているのか」と考えたものなど、2つ見つけて下さい。

(例) 日本橋のたもとにいるお坊さんは、なぜ仏像の絵をもって座っているのか

①

②

Q 2. 自分が見つけた疑問に対して、自分なりの考え（仮説）を書いて下さい。
（例） 絵に描かれているような仏像を作るための募金運動をしている。橋は
人がたくさん通るので、お金を集めるには都合が良かった。

①

②

年 組 氏名

③中世の鏡調査体験（村木准教授による解説）

平安末期から室町時代にかけて日本では多くの銅鏡が作成されており、それが歴博に所蔵されている。20面近くの銅鏡を題材に、時期ごとに分類する作業を通じて、それぞれの時期の特徴と時代背景について考える調査体験をおこなった。生徒たちは、短期間にそれぞれ特徴ある鏡が作られたことに驚いていた。模様に関しても、吉兆を示すツルやカメが多いことや、宗教関連のものが題材になっていることに気がついた生徒もいた。村木准教授からは、時期ごとの鏡の特徴を教えていただいたが、なぜ時期の前後関係がわかるのか、なぜ時期によってそのような違いが生まれるのか、疑問に思う生徒がいた。中世の鏡は、13世紀に入ると和鏡から擬漢式鏡に変化すると言っているが、なぜ変化したのか、変化した社会的文化的な背景を知りたいという疑問である。今回は、鏡の形式と鏡に描かれている模様を類型化して、その時代的な繋がりを確認する作業をおこなった。しかし重要なのは、そこから何がわかるかであろう。このような疑問を調査体験の場で顕在化させていきたい。

また、鏡を実際に手にすることでその重さを実感し、危険な水銀を使用したことに対して、当時の職人の気持ちに思いを馳せている生徒もいた。やはり、写真ではない実物が持つ「力」であろう。

④第1展示室解説（過程⑥）

第1展示室見学は、生徒が出してきた疑問や質問に村木准教授が答える形で進んだ。自分で疑問に思ったことを、その場で研究者が回答してくれるという体験は、生徒にとって非常に貴重な体験であった。大きなイヤリングや尖底深鉢型土器の使用 방법에驚き、昔の人々が前方後円墳をどのような形として意識していたのかを理解した。また環濠の深さから、弥生時代は戦争の時代であったと強くイメージしたようだ。疑問や質問に答えてもらうことで、展示された各時代の理解は深まったといえよう（実際の間答例を以下に記す）。
(I) 何故土器に装飾があるのか？手がこんでいるのとか、どのくらいかけて作ったのか。

先の尖った土器はどのように使ったのか。

〈予想〉祭りごと用？きれいに作って神に捧げます的な。職人がいたのではないか。だから時間はそんなにかかっていなさそう。

⇒先の尖った縄文早期の土器は、先端部分を地面にさして使った。先端部分は土の色であるが、真ん中から上部にかけてススが付いているものがあるが、それがその証拠である。先端部分が土に埋まっていたからススが付かなかった。派手な土器は、当時の人々の精神性を示している。人面土器は世界中にあり、農耕社会に入ると登場する。また、人面土器に穀物を入れることで、人の体の中に穀物を入れる＝豊作を祈願したとも考えられる。また、日本では、骨を入れる場合もあり、これは再生を祈ったとも考えられる。

(M) 高床の倉が現代の東南アジアの家に似ているのはなぜ。大量の穀物を運び込むはずなのに、なぜ階段が狭いのか。

〈予想〉当時の日本の気候が、今の東南アジアと似ているから。東南アジアから文化が伝わったから。

⇒復元するとき東南アジアの建物を参考にした。考古学的には柱穴しか残っていない。梯子は小さいのが現に出土している。高床の倉庫は鏡や土器に描かれている。奄美で見られるのも小さい梯子。

一方で課題も残っている。今回の取り組みでは、生徒はあらかじめ自分なりの考え（仮説）を提示しており、研究者の回答を踏まえて、再度自分の考えを深めるということを念頭においていた。生徒はさまざまな仮説を出してきたが、結果的には村木准教授の回答をそのまま受け入れた生徒がほとんどであった。村木准教授の回答もひとつの考え（仮説）として受けとめ、生徒が研究者との対話を通じて歴史認識を深めるという形に持っていくことはできなかった。やはり生徒にとって研究者は絶対的な存在であり、対話する対象と考えることは難しいようである。

(2) 2011 年度実践

①くらしの植物苑、企画展示「紅板締め」見学（過程①・⑤）

「私が一番興味深いと思ったのは、出物系の朝顔の同じ交配で4種の朝顔ができるということでした。ここから遺伝の法則を経験的に知っていたとは・・・最後のビニールハウスではずっとその違いを見ていたのですが・・・これはハマるなあと思いました（笑）。少しずつ違って、でも4種すべて共通している部分もあって、本当に可愛かったです」という感想に見られるように、生徒は江戸時代の町人が変化朝顔を作り出す過程で、遺伝の法則を経験的に知っていたことに驚くと同時に、美しさよりも奇抜さを追い求め、ハマった江戸時代の人々に、現代の「マニア」の姿を投影している。

同様に、紅板締めの展示解説では「下着なんて、ほんの少ししか、チラッとしか見えないうのに、あんなにこだわりを持つことが信じられなかった。数ミリもずらすことなく、染料の仕事をこなす当時の職人さんは本当に人間か？1枚1枚手作りしてもらうからこそ、あんな細かいところまで気を配ってオシャレしたいんだと思うと、その気持ちはよくわかるかも」という感想に見られるように、紅板締めに取り組んだ職人の高度な技術と、その

美意識の高さに対しても素直に感動している。

また、「朝顔も紅板締めも説明を聞いて、今までの『昔の日本人』に対するイメージが変わりました。更に日本人って凄い！面白い！と思え、尊敬しました」という感想を書いた生徒もいた。園芸や染色など、江戸時代の成熟した庶民文化に接して、今までの「昔の日本人」に対するイメージを大きく変化させている。

②第3展示室自由見学及び第3展示室解説（過程③・④）

2010年度は、まず第3展示室で榎澤が解説をおこない「問いの作り方」をいくつか示したあと、第1展示室で「変だなあ探し」をおこなった。今年度は日程の関係もあり、第2展示室の「武士の館のサル」の前に生徒を連れて行き、「なぜ、武士の館にサルがいるのだろうか」というような問いを作りなさいという指摘をおこなった後、すぐ第3展示室で「変だなあ探し」をおこなった。結果的には生徒が出してきた「問い」に大きな違いはなかった。生徒は展示された「モノ」の細部を見ており、そこから問いを作っている。その問いは、当然のことではあるが、歴博が示そうとしている近世の時代像に迫るものではなく、一問一答で答えられるものがほとんどであった。実際の対話例を以下に記す。

(N) 寛文長崎図屏風の中で魚の目が描かれている船があるのはなぜか？

〈予想〉 船なので、沢山魚が釣れるようお願いしているか、収穫への感謝の意味が込められているのかなと思いました。

⇒なぜ魚の目のような模様が描かれているのかはわからないが、その下にある文字に注目してみると、コーチやトンキン（ともにベトナム）、ジャガタラ（インドネシア）など東南アジアの地名が記載されている。長崎に寄港する船は、唐船（中国船）であるが、実際は東南アジアの諸国・諸地域を経由した船が長崎に入港していることがわかる。

(O) 江戸時代の初めは生糸を輸入していたのに、なぜ幕末になると輸出できるようになったのか。

〈予想〉 江戸時代まで、貿易をするうえで必ず「生糸」が輸入品に入ってくるころからも、日本の商業やあらゆる場面で生糸が重要な役割を得ていたのではないか。江戸の後期において、生糸が輸出品となったのも、日本人が品種改良などの熱心な活動により、実現したのかも知れない。

⇒生糸の輸入は幕府や藩の財政を苦しめたので、財政の立て直しのため、養蚕や絹織物業を奨励した。商品作物としての桑が植えられるようになり、京都の西陣織の技術が広まって、加賀や桐生、結城など地域を代表する特産物となって生産が飛躍的に拡大した。

「国際社会のなかの近世日本」のコーナーでは、近世日本は「鎖国」していたのではなく、4つの「口」を通じて世界に開かれていたという時代像を示そうという意図があるわけだが、生徒が注目したのは、寛文長崎図屏風の魚をモチーフにした船と、太鼓を持って行進している人々の姿であった。

そこで、その船の下に書かれている地名を読ませた。コーチやトンキンなど東南アジアの地名が書かれている。これらは唐船（中国船）であるが、ベトナムやインドネシアから

来た船であることがわかる。また、太鼓をもって行進している姿は、長崎のお祭り「長崎くんち」の様子をえがいたものだが、その周辺をよく見るとヨーロッパ人が歩いているのが見える。「長崎くんち」の時は出島にいたオランダ人も外出を許されており、それが描かれている。こうして生徒の「問い」を入り口にして、「鎖国」下の諸外国・諸地域との交流の実態＝「国際社会のなかの近世日本」に話をつなげることができる。

ひとりだけだったが、直接時代像に迫る問いを持った生徒がいた。「江戸時代の初めは生糸を輸入していたのに、なぜ幕末になると輸出できるようになったのか」という問いである。これは、「国際社会のなかの近世日本」のコーナーの真ん中に置かれている輸入品の中の代表的なものが生糸であることに注目し、その後、「村からみえる「近代」」のコーナーで、幕末において生糸が輸出されている状況を確認して、輸入から輸出への転換の理由を知りたいと考えたのである。生糸を入り口にして江戸時代像を生徒なりに構成できる「問い」であり、調べ学習の課題として生徒に示すことも可能であった。

5. 成果と課題

2回の実践とも、歴博展示の中から「問い」を見つけ出すことを重要な課題にしたが、時代像に迫るような「問い」は出てこなかった。2010年度は「江戸図屏風」の中の人物に注目させて、2011年度は「武士の館」のサルを題材に「問い」の作り方を指示したが、結局、一問一答で答えられるものがほとんどであった。「問い」にも、①理解を深める問い、②展示の意図を探求する問い、③時代の構造・時代像を問う問いなど、さまざまな段階の「問い」が想定される。歴博展示を使った「問い」の作り方をもう少し丁寧に生徒に示す必要があるように思われる。

2010年度と2011年度の実践の大きな違いは、生徒が展示室で見つけた疑問を、歴博の研究者に回答してもらおう形から、教員による授業形式にしたことである。研究者から疑問に直接答えてもらえるという「ワクワク・ドキドキ」感はなくなったが、話を一方的に聞くという形から、生徒が教員との「対話」を通じて、自らの疑問に対して主体的に関われるような形に変更したことである。

2010年度の実践では第1展示室、2011年度の実践では第3展示室のそれぞれ全体の展示を見学させて「問い」を作成させたが、展示が多岐にわたるため、さまざまな質問がだされ授業としてのまとまりを欠いたように思われる。第1展示室では旧石器時代から奈良時代までを、また第3展示室では近世を4つのテーマで展示している。例えば第1展示室であれば「弥生時代」に、第3展示室であれば「国際社会のなかの近世日本」に限定して「変だなあ探し」をおこなわせた方が授業らしくなったと反省している。

6. わたしの考える歴博活用案（3時間扱い）

展開	時間	○学習活動	●学習内容	指導上の留意点
----	----	-------	-------	---------

①	40分	<ul style="list-style-type: none"> ●第1・2展示室見学 ・「縄文土器」や「銅矛」、「朝鮮国告身」などを題材に、ワークシートを使った「変だなあ探し」の方法について解説をおこなう（展開例は次に示す）。 	<ul style="list-style-type: none"> ・質問が、理解を深める質問なのか、それとも展示の意図を探求する質問なのか、または時代の構造・時代像を問う質問なのかを意識させる。
②	60分	<ul style="list-style-type: none"> ○第3展示室「国際社会のなかの近世日本」のコーナー見学 ・展示されているものから、「変だなあ探し」をおこない、ワークシートに記入する ・疑問に対する、自分の考え(仮説)を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・展示物の細部を見るように指示する ・仮説を立てるときは、なるべく事実に基づいて書くように指示する。
③	40分	<ul style="list-style-type: none"> ●第3展示室解説 ・②の「変だなあ探し」で探し出した疑問に、教員が解説をおこない、生徒との間で意見交換ができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一問一答に終わらないように、繰り返し問題提起をおこなう。
④		<ul style="list-style-type: none"> ○課題研究 ・さらに深めたい課題を各自設定し、調べ学習をおこなう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・長期休業などを使ってレポート作成をおこなわせる。

展開①の指導例

A 理解を深める質問

- ①先のとがった土器をどのように使ったのか
 (解説)土器の上半分に煤がついているのはどのように使ったのかを考えさせる。



千葉市立加曾利貝塚博物館蔵

- ②なぜ武士の館にサルがいるのか

(解説)サルがいるのは馬小屋。武士にとって馬は大切な存在なので、サルは馬に取り付く悪霊から馬を守る守り神だった。



武士の館



馬小屋のサル

B 展示の意図を探求する質問

①なぜ大きさの違う銅矛が展示されているのか

(解説) 弥生時代のコーナーには、銅矛・銅鐸・銅戈・銅剣が大中小同じように展示されている。その展示の意図を読み取らせようという発問である。朝鮮半島から伝来した武器としての剣や矛、戈が、日本においては大型化し、祭器として使われるようになるということを理解させたい。



②夫婦の板碑（鎌倉時代）が同じ大きさで並んでいるのはなぜか



(解説) とともに丹治家治の子どもが亡くなった父母のために立てた板碑である。右＝丹治家治の妻の板碑で、死亡した 1241 年に建立された。右＝丹治家治の板碑で、38 回忌を記念して 1242 年に建立された。

鎌倉時代は、女性が地頭に任命されていることも踏まえ、鎌倉時代の夫婦の結びつきの強さ、女性の地位の高さを象徴していることを読み取らせたい。

C 時代の構造・時代像を問う質問

①対馬の人がなぜ朝鮮の官職をもらっているのか

(解説)「朝鮮国告身」は、朝鮮国王から対馬の早田氏に与えられた官職任命状である。

朝鮮が倭寇対策のために朝鮮の官職を与え、俸禄を支給していた。ここから中世における、日本－対馬－朝鮮の関係を考えさせたい。

②展示されている着物（アットウシ）とアイヌ絵の着物の襟の袷が違うのはなぜか

(解説) 展示されているアイヌの着物は袷が右前になっているが、

「蝦夷国魚場風俗図巻」(小玉貞良画)に描かれているアイヌ絵に登場するアイヌは、左前に描かれている。実際には右前で着ているアイヌを左前で描く意図は何なのか。その理由を考えさせてみたい。



南オーストラリア州立美術館蔵